

# 東南アジア史学会会報

No. 45

昭和61年10月

## 目 次

昭和61年度春季総会摘録	1	研究短報	16
「東南アジア—歴史と文化」		地区研究例会	18
購入のお願い	1	新入会員・住所変更等	18
第11期第1回委員会	2	事務局移転のお知らせ	19
第35回研究大会		「東南アジア—歴史と文化」	
プログラムと発表要旨	2	原稿募集・執筆要領	20

## 昭和61年度春季総会摘録

上記総会を昭和61年6月1日天理大学で開催し、生田滋委員が議長となり、次の議事をはかった。

1. 石井会長より会長挨拶があり、その後、第11期委員の紹介があった。
2. 庶務委員より新入会員9名の紹介、学会会報44号の発行について説明があった。
3. 前会計委員より昭和60年度決算報告があり、会計監査委員の承認を受けたことが説明された。  
総会は同報告を承認した。
4. 編集委員より「東南アジア—歴史と文化」第15号の発行および次号掲載論文等の投稿締切り期日について説明があった。また、同誌の販売状況についての説明があり、現在、バックナンバーの在庫が大量にたまっていること、かかる状況が続くと雑誌の発行自体を断らざるを得ないという平凡社側の申し入れがあったことが報告された。今後、会員各位の一層の努力をお願いするとともに、関係機関への雑誌購入の働きかけの要請があり、承認された。
5. 関東、関西、中部の地区委員より、各地区の例会開催状況が紹介された。

## 「東南アジア—歴史と文化」購入のお願い

上記「春季総会摘録」の第4項に述べられており、「東南アジア—歴史と文化」の販売状況が芳しくなく、このままでは同誌の発行自体が危機的な状況に陥ります。この問題につきましては、学会会員の衆知を集めて対応しなければなりませんが、さしあたり、会員の皆様が同誌を積極的に購入して下さることを切望する次第です。

すでに15号まで刊行されている同誌を、さらに発展させていくためにも、何とぞ御協力下さるようお願い致します。また同誌に関心をもつ方々、大学、図書館等にも広く講読をおすすめ下さるとさいわいです。

「東南アジア—歴史と文化」編集委員一同

在庫状況
7号 31部
8号 29部
12号 25部
13号 103部
14号 188部
15号 168部

# 東南アジア史学会会報

No. 45

昭和61年10月

## 目 次

昭和61年度春季総会摘録	1	研究短報	16
「東南アジア—歴史と文化」		地区研究例会	18
購入のお願い	1	新入会員・住所変更等	18
第11期第1回委員会	2	事務局移転のお知らせ	19
第35回研究大会		「東南アジア—歴史と文化」	
プログラムと発表要旨	2	原稿募集・執筆要領	20

## 昭和61年度春季総会摘録

上記総会を昭和61年6月1日天理大学で開催し、生田滋委員が議長となり、次の議事をはかった。

1. 石井会長より会長挨拶があり、その後、第11期委員の紹介があった。
2. 庶務委員より新入会員9名の紹介、学会会報44号の発行について説明があった。
3. 前会計委員より昭和60年度決算報告があり、会計監査委員の承認を受けたことが説明された。  
総会は同報告を承認した。
4. 編集委員より「東南アジア—歴史と文化」第15号の発行および次号掲載論文等の投稿締切り期日について説明があった。また、同誌の販売状況についての説明があり、現在、バックナンバーの在庫が大量にたまっていること、かかる状況が続くと雑誌の発行自体を断らざるを得ないという平凡社側の申し入れがあったことが報告された。今後、会員各位の一層の努力をお願いするとともに、関係機関への雑誌購入の働きかけの要請があり、承認された。
5. 関東、関西、中部の地区委員より、各地区の例会開催状況が紹介された。

## 「東南アジア—歴史と文化」購入のお願い

上記「春季総会摘録」の第4項に述べられており、「東南アジア—歴史と文化」の販売状況が芳しくなく、このままでは同誌の発行自体が危機的な状況に陥ります。この問題につきましては、学会会員の衆知を集めて対応しなければなりませんが、さしあたり、会員の皆様が同誌を積極的に購入して下さることを切望する次第です。

すでに15号まで刊行されている同誌を、さらに発展させていくためにも、何とぞ御協力下さるようお願い致します。また同誌に関心をもつ方々、大学、図書館等にも広く講読をおすすめ下さるとさいわいです。

「東南アジア—歴史と文化」編集委員一同

在庫状況
7号 31部
8号 29部
12号 25部
13号 103部
14号 188部
15号 168部

# 東南アジア史学会会報

No. 45

昭和61年10月

## 目 次

昭和61年度春季総会摘録	1	研究短報	16
「東南アジア—歴史と文化」		地区研究例会	18
購入のお願い	1	新入会員・住所変更等	18
第11期第1回委員会	2	事務局移転のお知らせ	19
第35回研究大会		「東南アジア—歴史と文化」	
プログラムと発表要旨	2	原稿募集・執筆要領	20

## 昭和61年度春季総会摘録

上記総会を昭和61年6月1日天理大学で開催し、生田滋委員が議長となり、次の議事をはかった。

1. 石井会長より会長挨拶があり、その後、第11期委員の紹介があった。
2. 庶務委員より新入会員9名の紹介、学会会報44号の発行について説明があった。
3. 前会計委員より昭和60年度決算報告があり、会計監査委員の承認を受けたことが説明された。  
総会は同報告を承認した。
4. 編集委員より「東南アジア—歴史と文化」第15号の発行および次号掲載論文等の投稿締切り期日について説明があった。また、同誌の販売状況についての説明があり、現在、バックナンバーの在庫が大量にたまっていること、かかる状況が続くと雑誌の発行自体を断らざるを得ないという平凡社側の申し入れがあったことが報告された。今後、会員各位の一層の努力をお願いするとともに、関係機関への雑誌購入の働きかけの要請があり、承認された。
5. 関東、関西、中部の地区委員より、各地区の例会開催状況が紹介された。

### 「東南アジア—歴史と文化」購入のお願い

上記「春季総会摘録」の第4項に述べられており、「東南アジア—歴史と文化」の販売状況が芳しくなく、このままでは同誌の発行自体が危機的な状況に陥ります。この問題につきましては、学会会員の衆知を集めて対応しなければなりませんが、さしあたり、会員の皆様が同誌を積極的に購入して下さることを切望する次第です。

すでに15号まで刊行されている同誌を、さらに発展させていくためにも、何とぞ御協力下さるようお願い致します。また同誌に関心をもつ方々、大学、図書館等にも広く講読をおすすめ下さるとさいわいです。

「東南アジア—歴史と文化」編集委員一同

在庫状況
7号 31部
8号 29部
12号 25部
13号 103部
14号 188部
15号 168部

## 第11期第1回委員会

昭和61年6月1日に天理大学で委員会を開催した。出席者17。会長が議長となり、総会提出案件を審議決定した。

## 第35回研究大会

昭和61年5月31日(土)、6月1日(日)の両日、天理大学で開催され、100名以上の出席者が参集する盛会であった。第1日の研究発表が終了した後、大学に近い天理教第38母屋で懇親会を開催した。大会プログラムと発表要旨は以下の通りである。

5月31日(土)

開会挨拶

大会準備委員長 中村孝志(天理大学)

<自由発表>

「ラオス－タイ」の誕生

竹原 茂(麗澤大学)

チュラーロンコーン王及びワチラーウット王時代

における現代タイ国家イデオロギーの起源

ビルマにおける「近代小説」の成立

村嶋英治(アジア経済研究所)

古典ムラユ語の「掛け」文体について

堀田桂子(大阪外大)

黎朝初期ベトナムにおける官僚制国家の形成過程

柴田紀男(天理大学)

堕和羅と投和

八尾隆生(京都大学)

山本達郎

6月1日(日)

<共通論題> 東南アジア研究の現状と展望

趣旨説明

土屋健治(京都大学)

報告1 考古学の視点から

新田栄治(鹿児島大学)

報告2 文化人類学の視点から

前田成文(京都大学)

報告3 経済学の視点から

原洋之介(東京大学)

報告4 「地域研究」の視点から

白石昌也(大阪外大)

コメント

報告1に対して

量 博満(上智大学)

報告2に対して

関本照夫(一橋大学)

報告3に対して

大木 昌

報告4に対して

寺田勇文(鹿児島大学)

会員総会

特別報告 歴史学の視点から

Michael Aung-Thwin(Elmira College, 京都大学)

総括討論

閉会挨拶

会長 石井米雄(京都大学)

## 第11期第1回委員会

昭和61年6月1日に天理大学で委員会を開催した。出席者17。会長が議長となり、総会提出案件を審議決定した。

## 第35回研究大会

昭和61年5月31日(土)、6月1日(日)の両日、天理大学で開催され、100名以上の出席者が参集する盛会であった。第1日の研究発表が終了した後、大学に近い天理教第38母屋で懇親会を開催した。大会プログラムと発表要旨は以下の通りである。

5月31日(土)

開会挨拶

大会準備委員長 中村孝志(天理大学)

<自由発表>

「ラオス－タイ」の誕生

竹原 茂(麗澤大学)

チュラーロンコーン王及びワチラーウット王時代

における現代タイ国家イデオロギーの起源

ビルマにおける「近代小説」の成立

村嶋英治(アジア経済研究所)

古典ムラユ語の「掛け」文体について

堀田桂子(大阪外大)

黎朝初期ベトナムにおける官僚制国家の形成過程

柴田紀男(天理大学)

堕和羅と投和

八尾隆生(京都大学)

山本達郎

6月1日(日)

<共通論題> 東南アジア研究の現状と展望

趣旨説明

土屋健治(京都大学)

報告1 考古学の視点から

新田栄治(鹿児島大学)

報告2 文化人類学の視点から

前田成文(京都大学)

報告3 経済学の視点から

原洋之介(東京大学)

報告4 「地域研究」の視点から

白石昌也(大阪外大)

コメント

報告1に対して

量 博満(上智大学)

報告2に対して

関本照夫(一橋大学)

報告3に対して

大木 昌

報告4に対して

寺田勇文(鹿児島大学)

会員総会

特別報告 歴史学の視点から

Michael Aung-Thwin(Elmira College, 京都大学)

総括討論

閉会挨拶

会長 石井米雄(京都大学)

## 《発表要旨》

〈自由発表〉

「ラオス－タイ」の誕生 — 仏暦1600年～2300年（西暦1057～1757） — 竹原 茂

約1000年前（仏暦1500年）、ノンセー時代のアイラオ民族（別名、タイ民族）は、文化的、経済的、軍事的に繁栄した国だった。仏暦764年から808年まで、中国の支配下にあったが、中国は反乱が起こって、三つに分かれてしまった。この機会にアイラオ民族は再統一され、自由、独立国となったのである。つまり、ラオスは当時下記のごとく六つの地区がより集まつたわけである。(1)モンカイチャウ、(2)シロンチャウ、(3)ジットシックチャウ、(4)タオジムチャウ、(5)ロンクンチャウ、(6)モンセチャウである（注：モンはムアンMuang=国、町、ロンはルアン=大きいという意味である）。その後、仏暦1192年（約1337年前）に、シヌロー王によって、ノンセー王朝のアイラオが誕生した。中国は「南詔」すなわち「南の王」と呼ぶ。ノンセー王朝時代のアイラオたちは、互いに「Thâi」とよんでいた。中国に二度にわたって支配されたので、今度は中国からはっきりと区別できるようにしたいという考え方で、「Thâi」あるいは「Thai」という接頭辞をつけたわけである。ThâiあるいはThaiは天または星の国からきた民族の意味で、古代にはアイラオまたはアイダオとよばれた人々が自分の部族の名前にこのことば（ThâiあるいはThai）を使うようになったのである。ノンセー時代のアイラオ（タイ民族）は、数回にわたって中国との戦争に勝利を得た。仏暦1201～1450年、ノンセー（あるいは南詔）王朝は四つの地区を連合国とし、それぞれの国（地区）に王をおいていた。つまり、(1)コーサムピ・セーンヴィー（ナムミン、またはナムムアンともよぶ）、(2)ヨーノック・シャンセーン（ユアンシャン、またはスニャーンともよぶ）、(3)チャウラニー・ナコーン（交趾のち東京）、(4)ヴェサーリー・ルアン（北アッサム、現在はインドのマニプールに当たる）。仏暦1290年までは、”広大な国”と同時に”大いに繁栄した国”と言われた。その当時、中国の王はアイラオ（タイ民族）の王と中国の姫を結婚させ、後世のアイラオ民族の一部が中国との混血となるきっかけをつくった。

その後、先見の明があるクンプロム・マハーラート王は、ノンセー王朝を拡大し、分割支配するため、七人の王子を七つの地区に派遣した。すなわち(1)クンロー王子→ムアン・スゥア（現ルアンプラバン。ラオスゥア・ランチャンともよぶ。その後ラーンサンとなる）、(2)ジーパラーン王子→シップソーンパンナ地区、(3)サームチウソン王子→ホアパン（黒河の下流）地区、(4)サイポン王子→ラーンナ地区、(5)グアイン王子→アヨチヤ地区（その後アナチャクサヤーム、現在のタイ王国となる）、(6)ロックコム王子→モーンホンサー地区（その後アナチャク・タイヤイ、現在のビルマとなる）、(7)チェッチャーン王子→ムアン・プアン（チャンニン高原）地区、である。

アイラオ民族はその後、互いに争ったあげく、四つの国に分裂した。

(1)タイ・ヤイ、タイ・ダム（ビルマの北部の支配者になった）。ギョウ、チャン（サーン）族となって、シャン国を作った。

(2)タイ・アホム、ヒンドゥー族（インドの支配者になった）。

(3)タイ・ルー、タイ・クン（Thai Kheun）、タイ・チュンチャンなど・・・中国南部、ベトナム「ユーアン」の支配者になった。

(4)メーラオ（現ラオス）はフランスの保護国になった。

ルー、クン、ギョウ、チャン（サーン）、ユーアン、ラオ、タイは、全て同じ民族で、「タイ民族系」に属する。当時、タイ民族はメコン河の下流に南下し、タイとラオスに分かれた。この二つの民族はレームトーン、またはスワンナプーム・ペテート（現インドシナ半島）で、支配的な役割をはたした（仏暦1600年～2300年まで=西暦1057年～1757年まで）が、支配権の問題や開

争のためにラーンサン国（ヴィエンチャンを首都にする）とサヤーム国（クルンテープを首都にする）に分裂した。

以上がラオス年代記に描かれた「ラオス－タイの誕生」の歴史である。

### チュラーロンコーン王及びワチラーウット王時代における

#### 現代タイ国家イデオロギーの起源

村嶋英治

現代タイの公的国家イデオロギーは、民族（チャート）、宗教、国王の三要素からなる。この三要素中の宗教とは基本的に仏教を意味する。この仏教は国王とともに伝統的タイの政治原理である仏教的国王制の基礎をなしている。一方、チャートは相対的に新しい考え方である。

チャートの考え方のシャムへの導入は Vella や Wyatt などの研究においてもワチラーウット王（在位1910～1925）の政治思想との関連で論じられており、Vella はこの国家イデオロギー自体が同王による輸入であるとさえいっている。本発表では、上記見解とは異なり、民族的政治共同体という意味でのチャート（あるいはチャート・バーンムアン）の考え方の起源を同王の治世より遡り、シャムが直面した最大の独立の危機の時期（1880年代半ば以後10年間）に求める。タイ人の西欧留学経験を有する第一世代である知識人官僚たちが、この時期にチャートをシャムの独立に関する論説などで頻用している。このような官僚として、プリサダーン親王、チャオプラヤー・バーサコーラウォン、クンルアンプラヤー・ガイシーを挙げることができる。しかも注目すべきことは、チャートが仏教的国王制論の一部として組み込まれ、国王を選出した共同体という意味で用いられている場合もあることである。このようにチャートの考え方の導入はシャムの伝統的政治原理を必ずしも変えるものではなかった。同時にこの時期にチュラーロンコーン王はタイの政治原理の独自性を積極的に主張している。その理由として同王は、西欧の政治原理は西欧各国の個別の歴史の中で形成されたものであり普遍的なものではないこと、西欧諸国の国王は人民の進歩を抑圧する存在になってしまったのに対し逆にシャムの国王は遅れた人民をリードしていること、しかも仏教的正義に立脚していること、などを挙げている。同王自身も1897年の訪欧以後しばしばチャートへの忠誠を人民に諭している。

以上のようにタイの国家イデオロギーの原型は、仏教的国王制論とチャートの考え方の結合、及びタイの伝統的政治原理の独自的価値の確信をベースにチュラーロンコーン王治世の後半に形成されたとみることができる。

ワチラーウット王は9年間に及ぶ英国留学にも拘らず、基本的政治思想は父王の世代のタイ人のものを継承している。同王は国家イデオロギーの人民への浸透を目的に Kong Suapa を組織し、このメンバーに「Suapa 精神を喚起する」という連続講演をしているが、そこで示されたチャートと国王の関係は前世代のものの繰返しである。同王の時代は父王の時代に比べ独立の危機は相対的に減じたものの国内の専制王制批判は一層高まった。これには海外での国王専制体制の崩壊も少なからず影響を与えており、とりわけ中国の革命運動（シャムでは Kek Meng といわれた）の与えた影響は大きい。これは1912年2月末のラタナコーシン暦130年（1911/12年）事件の発覚などに示されている。この事件以後同年央から1916年にかけ国王はアサワバーフ(ASVABAHU)の筆名で多数の政治論を発表している。これらの政論の主要テーマは国内外の欧米指向の革命運動、ナショナリズム運動批判である。国王は東洋には立憲主義は不適であることを中国、トルコ、インドなどの失敗をあげて強調し、これらの革命家をユートピアンもしくは Mettrayist（プラ・シーアーン信者）として非難している。また欧米を真似ることは模倣主義であり、固有文化の創

争のためにラーンサン国（ヴィエンチャンを首都にする）とサヤーム国（クルンテープを首都にする）に分裂した。

以上がラオス年代記に描かれた「ラオス－タイの誕生」の歴史である。

### チュラーロンコーン王及びワチラーウット王時代における

#### 現代タイ国家イデオロギーの起源

村嶋英治

現代タイの公的国家イデオロギーは、民族（チャート）、宗教、国王の三要素からなる。この三要素中の宗教とは基本的に仏教を意味する。この仏教は国王とともに伝統的タイの政治原理である仏教的国王制の基礎をなしている。一方、チャートは相対的に新しい考え方である。

チャートの考え方のシャムへの導入は Vella や Wyatt などの研究においてもワチラーウット王（在位1910～1925）の政治思想との関連で論じられており、Vella はこの国家イデオロギー自体が同王による輸入であるとさえいっている。本発表では、上記見解とは異なり、民族的政治共同体という意味でのチャート（あるいはチャート・バーンムアン）の考え方の起源を同王の治世より遡り、シャムが直面した最大の独立の危機の時期（1880年代半ば以後10年間）に求める。タイ人の西欧留学経験を有する第一世代である知識人官僚たちが、この時期にチャートをシャムの独立に関する論説などで頻用している。このような官僚として、プリサダーン親王、チャオプラヤー・バーサコーラウォン、クンルアンプラヤー・ガイシーを挙げることができる。しかも注目すべきことは、チャートが仏教的国王制論の一部として組み込まれ、国王を選出した共同体という意味で用いられている場合もあることである。このようにチャートの考え方の導入はシャムの伝統的政治原理を必ずしも変えるものではなかった。同時にこの時期にチュラーロンコーン王はタイの政治原理の独自性を積極的に主張している。その理由として同王は、西欧の政治原理は西欧各国の個別の歴史の中で形成されたものであり普遍的なものではないこと、西欧諸国の国王は人民の進歩を抑圧する存在になってしまったのに対し逆にシャムの国王は遅れた人民をリードしていること、しかも仏教的正義に立脚していること、などを挙げている。同王自身も1897年の訪欧以後しばしばチャートへの忠誠を人民に諭している。

以上のようにタイの国家イデオロギーの原型は、仏教的国王制論とチャートの考え方の結合、及びタイの伝統的政治原理の独自的価値の確信をベースにチュラーロンコーン王治世の後半に形成されたとみることができる。

ワチラーウット王は9年間に及ぶ英国留学にも拘らず、基本的政治思想は父王の世代のタイ人のものを継承している。同王は国家イデオロギーの人民への浸透を目的に Kong Suapa を組織し、このメンバーに「Suapa 精神を喚起する」という連続講演をしているが、そこで示されたチャートと国王の関係は前世代のものの繰返しである。同王の時代は父王の時代に比べ独立の危機は相対的に減じたものの国内の専制王制批判は一層高まった。これには海外での国王専制体制の崩壊も少なからず影響を与えており、とりわけ中国の革命運動（シャムでは Kek Meng といわれた）の与えた影響は大きい。これは1912年2月末のラタナコーシン暦130年（1911/12年）事件の発覚などに示されている。この事件以後同年央から1916年にかけ国王はアサワバーフ(ASVABAHU)の筆名で多数の政治論を発表している。これらの政論の主要テーマは国内外の欧米指向の革命運動、ナショナリズム運動批判である。国王は東洋には立憲主義は不適であることを中国、トルコ、インドなどの失敗をあげて強調し、これらの革命家をユートピアンもしくは Mettrayist（プラ・シーアーン信者）として非難している。また欧米を真似ることは模倣主義であり、固有文化の創

造性という文明の真の意味に反する、タイ人は自らの先祖のやり方に学ぶことが文明の道であると論している。ここにも父王と同一のタイ的政治原理の独自性の主張を見ることができる。

### ビルマにおける「近代小説」の成立

堀田桂子

ビルマにおいては、1904年『マウン・インマウンとマ・メーマのウットゥ』(James Hla, Kyaw, Maung Yin Maung Ma, Me Ma, Wutthu.)以降輩出することとなった散文体物語群を「近代小説」と称する。それらは、従来のウットゥ（一般には「仏教經典における本生譚、仏伝などを基にして書かれた散文文学」と理解される）と区別し、カーラポー（近代）を冠してカーラポーウットゥと呼ばれる。ここでは、その成立期に焦点をあて、ビルマにおいて「近代小説」と理解されるものの概念とその成立の背後にあるものを探ることを目的とする。

従来「書かれた文芸」の中で物語世界をになってきたのは、前述のウットゥや、ラーマーヤナ、イーナウン物語をはじめ様々な神話的モティーフを素材とした韻散混合文の宮廷物語、劇文学などであった。そして、初期の「近代小説」にあっては、一般に重視される西洋小説の影響とともに、こうした文学遺産の継承の上に、表現様式の模索が続けられてきたのである。

例えば前述の作品は「モンテクリスト伯」の翻案であるといわれるが、同時に宮廷物語や劇文学に見られたプロットをも保っている。また、冒頭の「読者に対する語り」は明らかに従来のウットゥの一つの定型を踏襲したものであるが、ここでは、さらに「実在の人物」を描くための新たな装置へと昇華されることとなった。この冒頭の試みは、本文中に表出する「叙述者」の存在や、翻案の操作を通じて深化した「現実の模倣」技術などに裏打ちされて、「人間社会を横写して描く散文の（創作）文学」の萌芽をもたらすこととなった。

一方、この作品の成功に触発されて出たウー・チーの『ローゼル売りのマウン・フマインのウットゥ』(U: Kyi:, Khyinmaungy wetthe Maung Hmaing Wutthu, 1904) も、市井の人間、野菜売りを主人公にしていた。女性遍歴のプロットをウットゥに込め、一介の野菜売りが宮廷の枢密官になるといった設定を行ったという意味においてこの作品もまさしく「近代小説」なのではあるが、「マウン・インマウン・・・」とは異なる様相をもつ。前作がもったようなウットゥの叙述の構造への意識や表現主体としての自意識などは見られず、極めてナラティブに語られる。また、叙情の表出箇所には、口承文芸の影響を思わせる語りの文体や劇文学における韻文、歌謡の使用が見られる。

これら初期の近代小説における表現様式の模索を、リアリズムを洗練させてゆく表現史における一過程と見ることも勿論必要だが、「近代小説」の作家達の立脚地点や教育基盤、受容者（読者）のあり方、「近代小説」の流通を担う出版機構などに視野を広げてみると、こうした表現様式の混在こそが当時の文学的状況から生み出されたものであるとの指摘が可能となる。例えば、英國植民地下にあって、国立学校を出たのち政府官僚を務めたジェイムスと、王朝の事務官として仕官し王朝滅亡後下ビルマに出て印刷所の校正者を務めたウー・チーは、はからずも初期「近代小説」作家たちの職業基盤、教養の立脚点において異なる二つの典型を示すし、そこには文学における中心が上ビルマから印刷の拠点である下ビルマへと移ったという事情が透けてくる。なにより、文学が印刷物を主要な表現手段に用いるようになる過程があり、教育制度の充実に支えられ、新聞や「劇文学」の公衆が母胎となって「近代小説」を支える読者が形成されたのであり、そのことは商品としての本を考察する際にも重要な要素を占める。こうした外在的諸状況の上に作家個人の言説模索を重ねた所に、20世紀初頭ビルマにおける「近代小説」の成立が立脚すると考えられる。

造性という文明の真の意味に反する、タイ人は自らの先祖のやり方に学ぶことが文明の道であると論している。ここにも父王と同一のタイ的政治原理の独自性の主張を見ることがある。

### ビルマにおける「近代小説」の成立

堀田桂子

ビルマにおいては、1904年『マウン・インマウンとマ・メーマのウットゥ』(James Hla, Kyaw, Maung Yin Maung Ma, Me Ma, Wutthu.)以降輩出することとなった散文体物語群を「近代小説」と称する。それらは、従来のウットゥ（一般には「仏教經典における本生譚、仏伝などを基にして書かれた散文文学」と理解される）と区別し、カーラポー（近代）を冠してカーラポーウットゥと呼ばれる。ここでは、その成立期に焦点をあて、ビルマにおいて「近代小説」と理解されるものの概念とその成立の背後にあるものを探ることを目的とする。

従来「書かれた文芸」の中で物語世界をになってきたのは、前述のウットゥや、ラーマーヤナ、イーナウン物語をはじめ様々な神話的モティーフを素材とした韻散混合文の宮廷物語、劇文学などであった。そして、初期の「近代小説」にあっては、一般に重視される西洋小説の影響とともに、こうした文学遺産の継承の上に、表現様式の模索が続けられてきたのである。

例えば前述の作品は「モンテクリスト伯」の翻案であるといわれるが、同時に宮廷物語や劇文学に見られたプロットをも保っている。また、冒頭の「読者に対する語り」は明らかに従来のウットゥの一つの定型を踏襲したものであるが、ここでは、さらに「実在の人物」を描くための新たな装置へと昇華されることとなった。この冒頭の試みは、本文中に表出する「叙述者」の存在や、翻案の操作を通じて深化した「現実の模倣」技術などに裏打ちされて、「人間社会を横写して描く散文の（創作）文学」の萌芽をもたらすこととなった。

一方、この作品の成功に触発されて出たウー・チーの『ローゼル売りのマウン・フマインのウットゥ』(U: Kyi:, Khyinmaungy wetthe Maung Hmaing Wutthu, 1904) も、市井の人間、野菜売りを主人公にしていた。女性遍歴のプロットをウットゥに込め、一介の野菜売りが宮廷の枢密官になるといった設定を行ったという意味においてこの作品もまさしく「近代小説」なのではあるが、「マウン・インマウン・・・」とは異なる様相をもつ。前作がもったようなウットゥの叙述の構造への意識や表現主体としての自意識などは見られず、極めてナラティブに語られる。また、叙情の表出箇所には、口承文芸の影響を思わせる語りの文体や劇文学における韻文、歌謡の使用が見られる。

これら初期の近代小説における表現様式の模索を、リアリズムを洗練させてゆく表現史における一過程と見ることも勿論必要だが、「近代小説」の作家達の立脚地点や教育基盤、受容者（読者）のあり方、「近代小説」の流通を担う出版機構などに視野を広げてみると、こうした表現様式の混在こそが当時の文学的状況から生み出されたものであるとの指摘が可能となる。例えば、英國植民地下にあって、国立学校を出たのち政府官僚を務めたジェイムスと、王朝の事務官として仕官し王朝滅亡後下ビルマに出て印刷所の校正者を務めたウー・チーは、はからずも初期「近代小説」作家たちの職業基盤、教養の立脚点において異なる二つの典型を示すし、そこには文学における中心が上ビルマから印刷の拠点である下ビルマへと移ったという事情が透けてくる。なにより、文学が印刷物を主要な表現手段に用いるようになる過程があり、教育制度の充実に支えられ、新聞や「劇文学」の公衆が母胎となって「近代小説」を支える読者が形成されたのであり、そのことは商品としての本を考察する際にも重要な要素を占める。こうした外在的諸状況の上に作家個人の言説模索を重ねた所に、20世紀初頭ビルマにおける「近代小説」の成立が立脚すると考えられる。

## 古典ムラユ語の「掛け」文体について

柴田紀男

1. 「記伝」(hikayat < Arabic hikayat 「物語、引用」) の言語学的研究は次のような仮説を前提として行われている。これらの仮説自体、いまだ充分に検証されてはいない。
  - 1.1. ジャンルとしての記伝の形式 #kata yang empunya ceritera maka tersebutlah perkataan X ....demikianlah ceriteranya#
  - 1.2. 記伝の書かれた時代は無文字社会から文字社会への過渡期であった。
  - 1.3. 記伝の生産は少數の文字職人によって行われた。
  - 1.4. 記伝の消費は単数の読み手と複数の聞き手によって行われた朗読であった。
  - 1.5. 記伝の文体には、次のような口頭文学の文体(strategy)が広く浸潤ないし残存している。
    - 1.5.1. 加算(aggregation): #...&...&...&...&.....#
    - 1.5.2. 反復(recurrence): #...X...X.....#
    - 1.5.3. 冗長(redundancy)  
装飾(replenishment): #...X...#≡#...Xy...#≡#...Xyz...#  
「文選読み」: Ee=eE=E=e (e≡E)
    - 1.5.4. 省略(reduction): #...XYZ...WYZ...#≡#...XYZ...W...#
    - 1.5.5. 語詞は意味の時間的変異を含まない。
  2. 「掛け」文体(unmarked embedding)とは(1)のような文構成を言う。  
( [....] = 復元、(....) = 省略可 )
    - (1) ...segera diambilnya kanak-kanak itu (oleh Raja Muhammad)  
didukungnya (kanak-kanak itu) (oleh Raja Muhammad)  
lalu dibawanya (kanak-kanak itu) (oleh Raja Muhammad) kembali ke ...  
「掛け」文体は、1.5.4. の省略の一つの型と見なすことができる。動詞文においては古い情報を担う名詞句は省略することも省略しないことも補充することもできる。  
(2) .....seekor pelanduk.....  
Maka disalaknya oleh anjing itu (elanduk itu)  
hendak ditangkapnya (oleh anjing itu) (elanduk itu)  
maka tatkala dilihat oleh pelanduk anjing itu mendapatkan  
maka disalaknya (anjing itu) (oleh pelanduk itu)  
maka anjing itu undurlah.  
.....  
Maka tatkala dilihat oleh anjing pelanduk itu kembali pada tempatnya  
maka didapatkannya (elanduk itu) (oleh anjing itu) .....
    - (3) datanglah seekor gajah (yang) terlalu amat besar.
    - (4) keluarlah gajah itu φ membawa kanak-kanak itu φ memandikan (nya) ke ...

## 黎朝初期ベトナムにおける官僚制国家の形成過程

八尾隆生

ベトナム前近代史において、黎朝(1428~1789)五代聖宗の統治期(1460~97)は最も栄光に満ちた時代とされる。君主独裁政の為の官僚制度がこの期に確立したことを考えた場合、この

## 古典ムラユ語の「掛け」文体について

柴田紀男

1. 「記伝」(hikayat < Arabic hikayat 「物語、引用」) の言語学的研究は次のような仮説を前提として行われている。これらの仮説自体、いまだ充分に検証されてはいない。
  - 1.1. ジャンルとしての記伝の形式 #kata yang empunya ceritera maka tersebutlah perkataan X ....demikianlah ceriteranya#
  - 1.2. 記伝の書かれた時代は無文字社会から文字社会への過渡期であった。
  - 1.3. 記伝の生産は少數の文字職人によって行われた。
  - 1.4. 記伝の消費は単数の読み手と複数の聞き手によって行われた朗読であった。
  - 1.5. 記伝の文体には、次のような口頭文学の文体(strategy)が広く浸潤ないし残存している。
    - 1.5.1. 加算(aggregation): #...&...&...&...&.....#
    - 1.5.2. 反復(recurrence): #...X...X.....#
    - 1.5.3. 冗長(redundancy)  
装飾(replenishment): #...X...#≡#...Xy...#≡#...Xyz...#  
「文選読み」: Ee=eE=E=e (e≡E)
    - 1.5.4. 省略(reduction): #...XYZ...WYZ...#≡#...XYZ...W...#
    - 1.5.5. 語詞は意味の時間的変異を含まない。
  2. 「掛け」文体(unmarked embedding)とは(1)のような文構成を言う。  
( [....] = 復元、(....) = 省略可 )
    - (1) ...segera diambilnya kanak-kanak itu (oleh Raja Muhammad)  
didukungnya (kanak-kanak itu) (oleh Raja Muhammad)  
lalu dibawanya (kanak-kanak itu) (oleh Raja Muhammad) kembali ke ...  
「掛け」文体は、1.5.4. の省略の一つの型と見なすことができる。動詞文においては古い情報を担う名詞句は省略することも省略しないことも補充することもできる。  
(2) .....seekor pelanduk.....  
Maka disalaknya oleh anjing itu (elanduk itu)  
hendak ditangkapnya (oleh anjing itu) (elanduk itu)  
maka tatkala dilihat oleh pelanduk anjing itu mendapatkan  
maka disalaknya (anjing itu) (oleh pelanduk itu)  
maka anjing itu undurlah.  
.....  
Maka tatkala dilihat oleh anjing pelanduk itu kembali pada tempatnya  
maka didapatkannya (elanduk itu) (oleh anjing itu) .....
    - (3) datanglah seekor gajah (yang) terlalu amat besar.
    - (4) keluarlah gajah itu φ membawa kanak-kanak itu φ memandikan (nya) ke ...

## 黎朝初期ベトナムにおける官僚制国家の形成過程

八尾隆生

ベトナム前近代史において、黎朝(1428~1789)五代聖宗の統治期(1460~97)は最も栄光に満ちた時代とされる。君主独裁政の為の官僚制度がこの期に確立したことを考えた場合、この

通説も大過ないと言えよう。本発表は黎朝初期より聖宗に至る、官僚制国家の形成過程を、特に軍事面を中心に跡づけていくことを目的とする。

官僚制国家への指向は、前朝の陳朝末期及びそれを篡奪した胡氏の時代（14世紀後半～15世紀初）に既にその萌芽が見られる。その動きは明の永楽帝によるベトナム征服により、一時途絶してしまうが、その明を破って新たに黎朝をたてた清化（ティンホア）出身の黎利は、胡朝期の科挙合格者で、かつ陳朝の外孫でもある阮薦を帷幕に加え、独立闘争（1418～27）の末期より既に官僚制の整備に着手した。しかし、一方でこうした動きに反発する存在があった。黎利に従って独立に貢献した軍事集団（即ち史料でいう「功臣」達）がそれである。

この軍事集団に含まれる人物は、その出身地および集団に参加した時期によっていくつかに分類できるが、太祖黎利の治世に、宰相及び副宰相のポストに就いたのは、この集団中、挙兵初期より従軍し、かつ清化を出身地とする者（J. ウィットモア氏に従って以下「清化集団」と呼ぶ）が大半であり、彼らは同時に中央の軍事権をも掌握していた。また、地方においても、軍事に関しては各衛（黎初の軍事単位）の長官には史料に拠る限り全て清化集団を含むところの功臣が任せられた。民事に関する同様で、各道（黎朝の最高行政区分）の長官には功臣が任せられ、更にその下の府や県の文職にも、おそらくは功臣の推挙による者（武人も多く含まれたと思われる）が多く任せられた。こうして、太祖や阮薦の理想に反し、黎初には清化集団による支配体制が成立したのである。

むろん、これに対して皇帝側などからの反撃はあった。二代太宗（在位1433～42）期の科挙の実施や、三代仁宗（1442～59）期、摂政であった母后阮氏が一部の功臣と結んでその他の功臣を弾圧したことなどがその具体的な例である。しかし、結局のところ、清化集団による支配体制は仁宗の末期まで続いた。

とは言うものの、こうした流れの中で、清化集団内部に、一部の上位功臣の軍事貴族化と、下位功臣及び集団二世等の軍事官僚化という分離現象がおこってくる。そして多くの功臣を弾圧した仁宗とそれ自体分離しつつあった清化集団との間に隙ができた時、勃発したのが諒山王宣民によるクーデター（1459）である。

乏しい史料に拠る限り、宣民は官僚制国家への指向を有していた。しかし、その統治の実情は言えば、抜本的な改革が為されたとは言い難い。そして、クーデター功臣が朝廷内で跋扈することに反発した清化集団による逆クーデターが翌年発生し、聖宗が擁立される。

史料上ではこの逆クーデターを指揮したとされる清化集団上位の阮熾・丁列は仁宗期に一旦失脚して禁軍統帥権は有しておらず、この逆クーデターに最も貢献したのは清化集団中の禁軍将校クラスの者だといえる。聖宗はこの実情をふまえ、後者を改めて「清化軍事官僚集団」として再編し、一方で衰退しつつあった科挙を再興し、名実共に文・武班を分けた官僚制度の確立に成功した。1466年頃より始まる大々的な官制改革は、正にその総決算であったといえよう。

## 墮和羅と投和

山本達郎

通典（卷188）にみえる投和国の記事は、史料の乏しい西暦七世紀の東南アジア関係の記録として注目しなければならないが、その位置に関して二つの異なった説がある。一つはこれを墮和羅（Dvaravati）と同じ国とみてチャオプラヤ流域と考えるものであり（山本説）、他の一つはこれを北ボルネオに比定しようとするものである（野村亨氏説）。史料の性質上断定は困難であるが、それぞれの説に対して有利な点不利な点を並べて検討しておく必要がある。投和と墮和羅

通説も大過ないと言えよう。本発表は黎朝初期より聖宗に至る、官僚制国家の形成過程を、特に軍事面を中心に跡づけていくことを目的とする。

官僚制国家への指向は、前朝の陳朝末期及びそれを篡奪した胡氏の時代（14世紀後半～15世紀初）に既にその萌芽が見られる。その動きは明の永楽帝によるベトナム征服により、一時途絶してしまうが、その明を破って新たに黎朝をたてた清化（ティンホア）出身の黎利は、胡朝期の科挙合格者で、かつ陳朝の外孫でもある阮薦を帷幕に加え、独立闘争（1418～27）の末期より既に官僚制の整備に着手した。しかし、一方でこうした動きに反発する存在があった。黎利に従って独立に貢献した軍事集団（即ち史料でいう「功臣」達）がそれである。

この軍事集団に含まれる人物は、その出身地および集団に参加した時期によっていくつかに分類できるが、太祖黎利の治世に、宰相及び副宰相のポストに就いたのは、この集団中、挙兵初期より従軍し、かつ清化を出身地とする者（J. ウィットモア氏に従って以下「清化集団」と呼ぶ）が大半であり、彼らは同時に中央の軍事権をも掌握していた。また、地方においても、軍事に関しては各衛（黎初の軍事単位）の長官には史料に拠る限り全て清化集団を含むところの功臣が任せられた。民事に関する同様で、各道（黎朝の最高行政区分）の長官には功臣が任せられ、更にその下の府や県の文職にも、おそらくは功臣の推挙による者（武人も多く含まれたと思われる）が多く任せられた。こうして、太祖や阮薦の理想に反し、黎初には清化集団による支配体制が成立したのである。

むろん、これに対して皇帝側などからの反撃はあった。二代太宗（在位1433～42）期の科挙の実施や、三代仁宗（1442～59）期、摂政であった母后阮氏が一部の功臣と結んでその他の功臣を弾圧したことなどがその具体的な例である。しかし、結局のところ、清化集団による支配体制は仁宗の末期まで続いた。

とは言うものの、こうした流れの中で、清化集団内部に、一部の上位功臣の軍事貴族化と、下位功臣及び集団二世等の軍事官僚化という分離現象がおこってくる。そして多くの功臣を弾圧した仁宗とそれ自体分離しつつあった清化集団との間に隙ができた時、勃発したのが諒山王宣民によるクーデター（1459）である。

乏しい史料に拠る限り、宣民は官僚制国家への指向を有していた。しかし、その統治の実情は言えば、抜本的な改革が為されたとは言い難い。そして、クーデター功臣が朝廷内で跋扈することに反発した清化集団による逆クーデターが翌年発生し、聖宗が擁立される。

史料上ではこの逆クーデターを指揮したとされる清化集団上位の阮熾・丁列は仁宗期に一旦失脚して禁軍統帥権は有しておらず、この逆クーデターに最も貢献したのは清化集団中の禁軍将校クラスの者だといえる。聖宗はこの実情をふまえ、後者を改めて「清化軍事官僚集団」として再編し、一方で衰退しつつあった科挙を再興し、名実共に文・武班を分けた官僚制度の確立に成功した。1466年頃より始まる大々的な官制改革は、正にその総決算であったといえよう。

## 墮和羅と投和

山本達郎

通典（卷188）にみえる投和国の記事は、史料の乏しい西暦七世紀の東南アジア関係の記録として注目しなければならないが、その位置に関して二つの異なった説がある。一つはこれを墮和羅（Dvaravati）と同じ国とみてチャオプラヤ流域と考えるものであり（山本説）、他の一つはこれを北ボルネオに比定しようとするものである（野村亨氏説）。史料の性質上断定は困難であるが、それぞれの説に対して有利な点不利な点を並べて検討しておく必要がある。投和と墮和羅

が音韻の上からみて異なった国であるとする考えは成立し難い。通典の投和の記事の終わりの部分を眞臘に結びつけ、その前の部分と水眞臘との関係を想定するのは説得性に乏しい。投和に関する方角と距離と、墮和羅の記載との併存は山本説に不利に見えるが、これについては通典の記事の不正確な性質を十分に念頭において検討しなければならない。考古学的な遺蹟・遺物を問題とすると、投和を Dvaravati とする方が解釈し易い。

#### <共通論題> 東南アジア研究の現状と展望

##### 報告1 考古学の視点から

新田栄治

20年前、東南アジア考古学の転換点ともいえる発掘が実施された。タイのノンノクタ遺跡の発掘がそれである。ノンノクタ遺跡さらにはバンチェン遺跡が、以後の世界の東南アジア考古学研究、また日本における東南アジア考古学研究に与えた衝撃の大きさをふりかえってみると、今回の企画はまことに感慨深いものがある。

東南アジア考古学の近年の成果をひとことで表現するならば、東南アジアの自生と展開を明らかにすることの端緒が地についたことである。同時に、その研究を深化する過程で他地域との関係の意味の重要性も明らかになってきたことである。一見逆説的にみえるが、自律と他者との関係とは矛盾するものではない。過去20年間の東南アジア考古学の問題は考古学的方法から東南アジア世界をいかなるものとして理解し、再構築するかという点にあったといえる。自律性に重きを置いた東南アジア像を描く立場が強く現れたのが、この20年間の東南アジア考古学であった。

この間、ベトナムにおける旧石器時代から金属器時代に至る発展の過程が明らかにされたことは戦後の東南アジア考古学の最大の成果であることはいうまでもない。また、タイにおいても、独自の文化発展があったことが明らかとされたことも高く評価できる。しかし、文化的後進地域という従来の東南アジア像の否定と東南アジアの自律性とが強調されるあまり、他者との関係を認めない、あるいは東南アジアからの逆伝播すら主張される傾向がある点については批判しなければならない（個々の具体的な問題については口頭で触れる）。

東南アジア考古学研究の以上のような流れに抗し、自律性と他者との関係を当初から指摘してきたのが日本における東南アジア考古学研究である。それは自負してよいと思う。現在の欧米ではやらない、型式学といいわば古くさい方法が実は最も優れた方法であることを示した過程でもある。同時に、型式学的方法から年代論をのみ問題にしがちな日本の研究者にも反省の要がある。しかも日本の東南アジア考古学研究が決定的にダメなことは二次資料による研究であることである。現地での発掘で得た資料=一次資料のもつ重みは實に重い。

考古学は年代論ではない。また逆に年代論を抜きにした先史社会論も伝播論もない。残念ながら、これまでの東南アジア考古学は考古学の基本である両輪がアンバランスであった。日本の東南アジア考古学研究の課題は、まず現地で発掘を行うこと、そして一次資料に基づいたバランスのとれた研究を進めること、また二次資料からどこまで迫れるかにある。

##### <参考文献>

新田栄治 1984: 「1983年の考古学界の動向 — 東南アジア — 」『考古学ジャーナル』No.232  
pp.149-156.

新田栄治（印刷中）：「図説・世界の考古学 アジア編4（東南アジア）」福武書店  
(国分直一と分担)

が音韻の上からみて異なった国であるとする考えは成立し難い。通典の投和の記事の終わりの部分を眞臘に結びつけ、その前の部分と水眞臘との関係を想定するのは説得性に乏しい。投和に関する方角と距離と、墮和羅の記載との併存は山本説に不利に見えるが、これについては通典の記事の不正確な性質を十分に念頭において検討しなければならない。考古学的な遺蹟・遺物を問題とすると、投和を Dvaravati とする方が解釈し易い。

#### <共通論題> 東南アジア研究の現状と展望

##### 報告1 考古学の視点から

新田栄治

20年前、東南アジア考古学の転換点ともいえる発掘が実施された。タイのノンノクタ遺跡の発掘がそれである。ノンノクタ遺跡さらにはバンチェン遺跡が、以後の世界の東南アジア考古学研究、また日本における東南アジア考古学研究に与えた衝撃の大きさをふりかえってみると、今回の企画はまことに感慨深いものがある。

東南アジア考古学の近年の成果をひとことで表現するならば、東南アジアの自生と展開を明らかにすることの端緒が地についたことである。同時に、その研究を深化する過程で他地域との関係の意味の重要性も明らかになってきたことである。一見逆説的にみえるが、自律と他者との関係とは矛盾するものではない。過去20年間の東南アジア考古学の問題は考古学的方法から東南アジア世界をいかなるものとして理解し、再構築するかという点にあったといえる。自律性に重きを置いた東南アジア像を描く立場が強く現れたのが、この20年間の東南アジア考古学であった。

この間、ベトナムにおける旧石器時代から金属器時代に至る発展の過程が明らかにされたことは戦後の東南アジア考古学の最大の成果であることはいうまでもない。また、タイにおいても、独自の文化発展があったことが明らかとされたことも高く評価できる。しかし、文化的後進地域という従来の東南アジア像の否定と東南アジアの自律性とが強調されるあまり、他者との関係を認めない、あるいは東南アジアからの逆伝播すら主張される傾向がある点については批判しなければならない（個々の具体的な問題については口頭で触れる）。

東南アジア考古学研究の以上のような流れに抗し、自律性と他者との関係を当初から指摘してきたのが日本における東南アジア考古学研究である。それは自負してよいと思う。現在の欧米ではやらない、型式学といいわば古くさい方法が実は最も優れた方法であることを示した過程でもある。同時に、型式学的方法から年代論をのみ問題にしがちな日本の研究者にも反省の要がある。しかも日本の東南アジア考古学研究が決定的にダメなことは二次資料による研究であることである。現地での発掘で得た資料=一次資料のもつ重みは實に重い。

考古学は年代論ではない。また逆に年代論を抜きにした先史社会論も伝播論もない。残念ながら、これまでの東南アジア考古学は考古学の基本である両輪がアンバランスであった。日本の東南アジア考古学研究の課題は、まず現地で発掘を行うこと、そして一次資料に基づいたバランスのとれた研究を進めること、また二次資料からどこまで迫れるかにある。

##### <参考文献>

新田栄治 1984: 「1983年の考古学界の動向 — 東南アジア — 」『考古学ジャーナル』No.232  
pp.149-156.

新田栄治（印刷中）：「図説・世界の考古学 アジア編4（東南アジア）」福武書店  
(国分直一と分担)

## 報告2 文化人類学の視点から

前田成文

1. 最近の人類学は特定の社会なり文化なりを研究対象として、そこで見られる特殊な現象を基礎に一般理論へ向かう傾向のある学問として成長してきているので、地域研究とはなじみ易く、事実両者の関連は深い。しかし、人類学者の扱う地域は往々にして小さなコミュニティ単位で、地域研究が意図するような大きな地域単位ではないことと、たとえ数十人にみたない小さなコミュニティを扱っても人類史的なパースペクティブに立つということとは、両者が共に総合的な理解を目指すものとは言っても、微妙な隔たりがある。地域研究というのは、人類学をも含めて各ディシプリンの研究成果の断片を、地域という中間的な場で（恐らくは各ディシプリンの影を背負いながら）総合させ、その上で地域全体から見た研究を推進させる、いわば個々の研究の枠組みと言えよう。

2. とは言っても、人類学はそのアプローチも研究領域も実に多様である。

2.1. ある文化人類学の理論の入門書は、15のアプローチを立てている。言いかえれば人類学は確立した共通のパラダイムに乏しく、常に地方文化として止どまっている、その一つをとりあげただけでは全体像はつかめないとすることもある。その地方化を促進するものに、①実証主義、理念主義といった学問の系譜 ②対象社会から生じる特殊性 ③宗主国の遺産 ④各国研究者の伝統と自国研究の波 などが指摘しうる。

2.2. 人間の科学を標榜する人類学には、その対象となり得ない生活領域は殆ど無いといつてもよい程、研究領域は多岐にわたる。もともと民族誌というのは、比較的小さい社会における生活のあらゆる面を記述することに専念していたし、そのような記述の不可能な大規模な社会においても、いわゆる人類学者、民族学者と称する人の研究領域は、音楽、芸術から政治、経済、農業、医学、科学にまで及ぶ。

2.3. 最近では社会全体を記述した民族誌が少なくなって、社会の一部分の領域を社会学、経済学、政治学、農学、宗教学などの知識を駆使して記述分析するようになってきている。いわば総合研究から特殊研究へと変化してきて、特殊な問題を深く掘り下げなければ研究成果が認められなくなってきたことも事実である。また、人類学的手法や成果を他分野の研究者が用いることによって、学問の境界は一層ぼやけてくるようである。Indologie とか Malay Studies といった伝統を受けついだ人類学は学問の境界ということには無関心であり得るが、研究の専門化には限界がある。

2.4. 一方では J.P.B. de Josselin de Jong の民族学的領域としてのマレー群島あるいは F. Eggan の制御された比較のように地域内における文化的同質性を強調する比較研究もみられる。

2.5. いずれにしても、どのようなアプローチ、どのような研究対象を選択しようと、周縁と深層を記述する学としての民族誌の蓄積が今後とも必要である。

3. 今後の東南アジアにおける問題領域として(1)方法論、(2)生態環境、(3)従属構造、(4)アイデンティティが重要であると考えられる。

3.1. 人類学の在り方というものが東南アジア各国で問われ、開発にともなう社会科学者の役割が大きな問題となろう。それと共に文化的総体主義論争に見られるような、理性・合理性をめぐる普遍・特殊の問題、民族誌自体に対する反省も人類学を称する限りつきまとうであろう。

3.2. 人類学の萌芽期においても環境は文化を左右する要素として重視された歴史をもつが、Conklin, Vayda, Rappaport, Moerman, Geertz, Ellen, Condominas などの文化（人間）生態学的アプローチと共に、地球全体としての環境問題を各国がどのように対処していくかというマクロな問題が視野に入れられなければならない。

3.3. Heine-Geldern, Leach, Geertz や Tambiah の伝統的支配構造に関する研究と並んで、マルクス主義的分析が70年代に人類学に浸透してくると共に従属理論の影響を受けた J.Kahn などの業績も出ている。そのような流れをも含めて、もっと広い意味で政治・経済・社会・文化の面で支配・従属のシステムをもたらすメカニズムを個人、集団、コミュニティ、国家、国際のレベルで明らかにすることが期待される。

3.4. 国家、エスニシティ、宗教、言語、自我などにおけるアイデンティティの問題が、主体的行為とカテゴリー認識との関わり合いとからまりあって、問題の正面に出てくる。

3.5. 要するに東南アジアの人類学的研究も、システムと主体的行為という相剋の中で、観察者の視点と当事者の主張と予想される読者の解釈とをつきあわせながら、地域的視座から問題をしぼった民族誌を作っていくことになろう。人類学の解体・再編・統合のいずれかが地域研究を契機に生まれてくることが期待される。

#### <参考資料>

インドネシアの LIPI で1980～84年に許可された国別調査件数は次の通りである。（自然科学をも含み、人文・社会科学はこのうち62.1%を占める。）日本(168)、USA(139)、オランダ(110)、オーストラリア(66)、西ドイツ(43)、イタリア(36)、イギリス(25)、スイス(14)、フランス(11)、ニュージーランド(9)、カナダ(8)、ベルギー(8)、ノルウェー(5)、スエーデン(5)、デンマーク(3)、フィリピン(2)、シンガポール(2)、マレーシア(2)、オーストリア(1)。

#### <参考文献>

綾部恒雄編 1984. 「文化人類学15の理論」中公新書

日本民族学会編 1986. 「日本の民族学 1964～1983」弘文堂

Koentjaraningrat 1975. Anthropology in Indonesia, Martinus Nijhoff.

Hussein Fahim (ed.) 1982. Indigenous Anthropology in Non-Western Countries, Carolina Academic Press.

## 報告3 経済学の視点から

原洋之介

### 1. 経済学の視点

経済学の視点から東南アジア研究の現状について展望するにあたってまず必要なことは、経済学の視点とは何かを定義しておくことであろう。報告者はそれを「効率的な資源配分の達成という社会にとって重要な問題が決定されていく制度的仕組」を明らかにしていく価格理論的視点であると考えている。そして経済学のなかに、規範的アプローチと実証的アプローチとが区別されていることはよく知られている。以下東南アジア研究のなかで、実証的アプローチにもとづく経済学の視点がどういう意味を持ちうるかに関して報告してみることにする。

### 2. 開発経済学による東南アジア経済論

開発経済学は、政策提案をおこなうことを目的とした規範的アプローチをとっている。その政策提案は、まさに新古典派市場経済論そのものである。日本のこの代表例は、渡辺利夫氏の「成長のアジア・停滞のアジア」である。実証分析の視点からみて最も重要な問題は、東南アジア諸国内の要素（特に労働）市場が完全競争型の市場となっているとするこれら開発経済学者の判断は、はたして正当化されうるものであろうか。

### 3. 農村経済論

東南アジアの農村経済論のなかでは Hayami and Kikuchi, Asian Village Economy at the

3.3. Heine-Geldern, Leach, Geertz や Tambiah の伝統的支配構造に関する研究と並んで、マルクス主義的分析が70年代に人類学に浸透してくると共に従属理論の影響を受けた J.Kahn などの業績も出ている。そのような流れをも含めて、もっと広い意味で政治・経済・社会・文化の面で支配・従属のシステムをもたらすメカニズムを個人、集団、コミュニティ、国家、国際のレベルで明らかにすることが期待される。

3.4. 国家、エスニシティ、宗教、言語、自我などにおけるアイデンティティの問題が、主体的行為とカテゴリー認識との関わり合いとからまりあって、問題の正面に出てくる。

3.5. 要するに東南アジアの人類学的研究も、システムと主体的行為という相剋の中で、観察者の視点と当事者の主張と予想される読者の解釈とをつきあわせながら、地域的視座から問題をしぼった民族誌を作っていくことになろう。人類学の解体・再編・統合のいずれかが地域研究を契機に生まれてくることが期待される。

#### <参考資料>

インドネシアの LIPI で1980～84年に許可された国別調査件数は次の通りである。（自然科学をも含み、人文・社会科学はこのうち62.1%を占める。）日本(168)、USA(139)、オランダ(110)、オーストラリア(66)、西ドイツ(43)、イタリア(36)、イギリス(25)、スイス(14)、フランス(11)、ニュージーランド(9)、カナダ(8)、ベルギー(8)、ノルウェー(5)、スエーデン(5)、デンマーク(3)、フィリピン(2)、シンガポール(2)、マレーシア(2)、オーストリア(1)。

#### <参考文献>

綾部恒雄編 1984. 「文化人類学15の理論」中公新書

日本民族学会編 1986. 「日本の民族学 1964～1983」弘文堂

Koentjaraningrat 1975. Anthropology in Indonesia, Martinus Nijhoff.

Hussein Fahim (ed.) 1982. Indigenous Anthropology in Non-Western Countries, Carolina Academic Press.

## 報告3 経済学の視点から

原洋之介

### 1. 経済学の視点

経済学の視点から東南アジア研究の現状について展望するにあたってまず必要なことは、経済学の視点とは何かを定義しておくことであろう。報告者はそれを「効率的な資源配分の達成という社会にとって重要な問題が決定されていく制度的仕組」を明らかにしていく価格理論的視点であると考えている。そして経済学のなかに、規範的アプローチと実証的アプローチとが区別されていることはよく知られている。以下東南アジア研究のなかで、実証的アプローチにもとづく経済学の視点がどういう意味を持ちうるかに関して報告してみることにする。

### 2. 開発経済学による東南アジア経済論

開発経済学は、政策提案をおこなうことを目的とした規範的アプローチをとっている。その政策提案は、まさに新古典派市場経済論そのものである。日本のこの代表例は、渡辺利夫氏の「成長のアジア・停滞のアジア」である。実証分析の視点からみて最も重要な問題は、東南アジア諸国内の要素（特に労働）市場が完全競争型の市場となっているとするこれら開発経済学者の判断は、はたして正当化されうるものであろうか。

### 3. 農村経済論

東南アジアの農村経済論のなかでは Hayami and Kikuchi, Asian Village Economy at the

Crossroads が示している、非市場的制度が完全競争型労働市場とほとんど同じ機能をはたしているとする研究が、本報告の立場からみて興味深い。これは、東南アジアに固有とされてきた非市場的制度が、その資源配分機能の点では完全競争市場に近いとする分析である。これに、経済学の視点が最もよくあらわれている。この議論をつめることで、非市場的制度の存在理由が少しは明らかになるのではなかろうか（拙論「新古典派経済理論による農村社会論をこえて」）。

#### 4. 工業化にともなう労働市場の構造変化

このテーマに関しては2つの領域が重要である。第一は企業内での内部労働市場の形成であり、第二はそれと都市の雑業層との関係である。第一に関しては、小池和男氏による現地調査がはじまっている。第二に関しては、経済学者だけでなく社会学者によるスラム研究が重要であろう。これらの研究のなかに、経済的効率性の要求と東南アジア社会に固有の非市場的制度との対立ないし集合という重要な論点が示されていることが強調されるべきであろう（拙論 Relevance of Modern Economic Theory to Asian Development）。

#### 5. 東南アジア史へのアプローチ

せまい意味での東南アジア経済論をこえて、東南アジア史の研究のなかにも経済学的視点を導入することが可能であり、かつ一定の有効性をもちうるのではなかろうか。東南アジアの歴史の流れを、土地と労働（人口）との相対的賦存状態の長期的変化という経済学的視点から解釈し直してみると、それなりに意味をもつのではないか（拙論「商人国家アユタヤ王朝仮説について」）。

### 報告4 「地域研究」（者）の視点から

白石昌也

はじめに

- (1) 従来指摘してきたことで、何が依然として課題として残っているのか。
- (2) 1980年11月アジア政経学会シンポジウム司会者永瀬昭氏の予言（参文16）。

#### 1. 日本における東南アジア「地域研究」の展開

##### (a) 1950年代—1960年代中半

アメリカ型「地域研究」の導入と制度化の初期において、「地域研究」とは何か？の議論と、あるべき研究・教育体制の提示（参文8-12, 18）。そこで強調されたことは(1) inter-disciplinary アプローチ、(2) 現地語の習得と現地資料の活用、(3) フィールド・ワークまたは現地体験。しかし当時の状況（例えば参文10）からするならば、それらの条件を満たし得る研究活動は限定されたものであった。また研究・調査の側面のみが重視され、教育の側面はほとんど制度化されなかった。更に戦前から研究を継続している人々との接続に関して問題が残った。

##### (b) 1960年代中半—1970年代中半

一方における日本の東南アジア進出、他方における南北問題、ベトナム戦争。戦後第一世代研究者の国際的水準の研究成果。第二世代の修業開始（本格的成果は70年代後半）。ただし60年代後半の研究環境・条件はまだ不充分（それは70年代になって大幅に改善された）。また東南アジア史学会設立（1966）や（若手）研究者間の私的研究サークルの活動などは、相互交流、意見・情報交換、刺激を促進。また東南アジア人自身の研究の進展は現地語一次資料のみならず、現地語による研究業績のフォローをも必須とさせ始めた。更に従来の東南アジア「地域研究」への反省も現れ始めた。無論こういった方向での反省は前期にも皆無ではなかったが（ex. 参文10）、1960年代後半以降特に（参文24-26）、(1)研究者の層の薄さ、研究対象の地域的な

Crossroads が示している、非市場的制度が完全競争型労働市場とほとんど同じ機能をはたしているとする研究が、本報告の立場からみて興味深い。これは、東南アジアに固有とされてきた非市場的制度が、その資源配分機能の点では完全競争市場に近いとする分析である。これに、経済学の視点が最もよくあらわれている。この議論をつめることで、非市場的制度の存在理由が少しは明らかになるのではなかろうか（拙論「新古典派経済理論による農村社会論をこえて」）。

#### 4. 工業化にともなう労働市場の構造変化

このテーマに関しては2つの領域が重要である。第一は企業内での内部労働市場の形成であり、第二はそれと都市の雑業層との関係である。第一に関しては、小池和男氏による現地調査がはじまっている。第二に関しては、経済学者だけでなく社会学者によるスラム研究が重要であろう。これらの研究のなかに、経済的効率性の要求と東南アジア社会に固有の非市場的制度との対立ないし集合という重要な論点が示されていることが強調されるべきであろう（拙論 Relevance of Modern Economic Theory to Asian Development）。

#### 5. 東南アジア史へのアプローチ

せまい意味での東南アジア経済論をこえて、東南アジア史の研究のなかにも経済学的視点を導入することが可能であり、かつ一定の有効性をもちうるのではなかろうか。東南アジアの歴史の流れを、土地と労働（人口）との相対的賦存状態の長期的変化という経済学的視点から解釈し直してみるとことは、それなりに意味をもつのではないか（拙論「商人国家アユタヤ王朝仮説について」）。

### 報告4 「地域研究」（者）の視点から

白石昌也

はじめに

- (1) 従来指摘してきたことで、何が依然として課題として残っているのか。
- (2) 1980年11月アジア政経学会シンポジウム司会者永瀬昭氏の予言（参文16）。

#### 1. 日本における東南アジア「地域研究」の展開

##### (a) 1950年代—1960年代中半

アメリカ型「地域研究」の導入と制度化の初期において、「地域研究」とは何か？の議論と、あるべき研究・教育体制の提示（参文8-12, 18）。そこで強調されたことは(1) inter-disciplinary アプローチ、(2) 現地語の習得と現地資料の活用、(3) フィールド・ワークまたは現地体験。しかし当時の状況（例えば参文10）からするならば、それらの条件を満たし得る研究活動は限定されたものであった。また研究・調査の側面のみが重視され、教育の側面はほとんど制度化されなかった。更に戦前から研究を継続している人々との接続に関して問題が残った。

##### (b) 1960年代中半—1970年代中半

一方における日本の東南アジア進出、他方における南北問題、ベトナム戦争。戦後第一世代研究者の国際的水準の研究成果。第二世代の修業開始（本格的成果は70年代後半）。ただし60年代後半の研究環境・条件はまだ不充分（それは70年代になって大幅に改善された）。また東南アジア史学会設立（1966）や（若手）研究者間の私的研究サークルの活動などは、相互交流、意見・情報交換、刺激を促進。また東南アジア人自身の研究の進展は現地語一次資料のみならず、現地語による研究業績のフォローをも必須とさせ始めた。更に従来の東南アジア「地域研究」への反省も現れ始めた。無論こういった方向での反省は前期にも皆無ではなかったが（ex. 参文10）、1960年代後半以降特に（参文24-26）、(1)研究者の層の薄さ、研究対象の地域的な

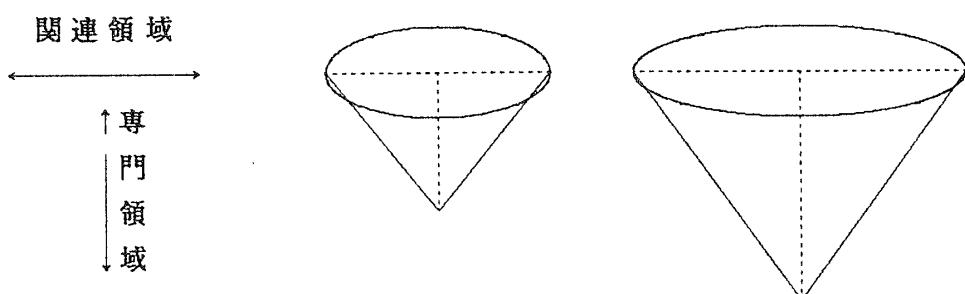
いしはイシュー的かたより、を改善する必要性、(2)日本人研究者としての特質・利点を生かした研究、日本人として何が貢献できるのかの問い合わせ、(3)ディシプリンと地域研究の関係に関する反省（特にディシプリンの側からアприオリに固定された枠組みをあてはめることへの批判、地域に密着した内在的な問題発見の必要性）、(4)前項と関連して、特に政治学・現代史の分野においては、東南アジア概論的な画一的叙述への批判、各国別の具体的・個別的記述の強調、(5)前二項と関連して欧米的 ethno-centric な視点への反省・警戒などの諸点が注目されるようになった。

### (c) 1970年代中半以降

アメリカにおけるベトナム戦争シンドローム。他方日本にとっての東南アジアの重要性増大、同時に東南アジアにおける反日批判を背景として、日本における対東南アジア関心の増大、資金力、研究環境の好転。学部レベルの教育体制の漸次拡大（ただし研究者養成のための大学院レベルの体制は限定的）。日本での国際シンポ開催、欧米や東南アジアへの日本人研究者の長期滞在、欧米語・現地語書籍の整備。特に1980年代に入ってから、戦後第三世代とも称すべき若手の登場。この時期に特徴的なことは、(1)「地域研究」の意味が再度問いかれる。(2)日本人研究者としての「関わり」方が、前期以上に問題とされる。(3)前期において指摘され始めた内在的理解が共通了解事項として定着、また現地語や現地体験に基づく個別的な研究の急速進展。その反面、各地域を横断する比較・包括的視点の希薄化。それに対する反省としての全体像再把握の必要性の認識。(4)欧米的 ethno-centricism に対する警戒・反省は依然として基調にある。ただし言葉は易く行うは難し。(5)東南アジア研究者との相互交流の必要性の強調。

## 2. 残された課題

### (1) ディシプリンと「地域研究」の関係。



研究対象への内在的理解の態度とその個性の尊重、関連領域に対する目配りまたその柔軟性。研究者個々人の self-identity の問題。研究者養成に際して、ディシプリン系統の学部（専門教育重視）か、area specialist としての訓練（general education 重視）か。

- (2) one-state, one-nation アプローチへの反省としての sub-culture や下位領域、周辺領域への下降は、政治学・現代史などに関しては重要と思われるが、文化人類学などにとっては、かえって逆の方向性が目下重要なのかもしれない。
- (3) 他方、各国の枠を越えて、東南アジア全体を考える方向性、ないしは国境の枠を越えて新たな地域枠組みの中での東南アジア論は、今後有望かつ必要。ただし更に東南アジア世界を越えた地域的広がりへの目配りは、（確かに特定のイシューに関しては南アジア・中国・日本に関する研究への目配りはみられるが、全体として）まだ殆どなされていないように思われる。
- (4) 日本人としての「関わり」の問題、また日本人として何が寄与できるのかは、今後更に自覚的にになされることが必要。と共に「地域研究」の存在意義は、日本においても、やはり「政策

科学」としての色彩が強い。

- (5) 各機関の蔵書（とくに東南アジアに関する欧米語・現地語定期刊行物）の情報交換。
- (6) 東南アジア研究との交流拡大のために、東南アジア史学会として何ができるのか。当面できることから積み重ねてゆく。たとえば学会員著作目録の英訳版の作製。

	欧 米	東南アジア	日 本
19c.以前	宣教師、重商主義的商人、官吏	伝統的 historiography	
植民地時代	植民地政策学と極東学・ジャワ学	ナショナリスト的 historiography vs. 植民地主義擁護	漢籍中心の南海史・南方史と南進論的関心の台頭
第二次 大戦期	アメリカにおける戦略・政策的人員養成と所謂「反植民地主義」		南方進出—「大東亜」研究と「大東亜解放」的民族運動史
1945年以降	「地域研究」体制の構築と戦略・政策的意図の同時進行	ナショナリスト的 historiographyの継承とアメリカ型「地域研究」の影響	戦時中の研究者+AALA連帯運動とアメリカ型「地域研究」の導入
ベトナム 戦争期	一方における戦争協力・擁護と、他方における自己反省	科学的ナショナリズムの進展(科学的帝国主義への反発)	ベトナム戦争・南北問題→戦後第二世代の登場、「地域研究」の進展と国際化
近年	回顧・反省と新たな模索の時期(新たな分析視角を求めて)	一国史的アプローチから東南アジア的視点への模索	日本の南方進出と東南アジアの反日批判、回顧と独自の視点を求めて

#### <参考文献>

- (1) Bruce Wood, "Area studies", in International Encyclopedia of the Social Science, vol.1, 1968.
- (2) Abdul Said, "The Impact of the Emergence of the Non-West upon Theories of International Relations", in his ed., Theory of International Relations, Prentice Hall Inc., Endlewood Cliffs (New Jersey), 1968.
- (3) Lucian Pye ed., Political Science and Area Studies, Indiana U.P., Bloomington, 1975.
- (4) D.G.E.Hall ed., Historians of South East Asia, Oxford U.P., London, 1961.
- (5) C.D.Cowan and O.W.Wolters eds., Southeast Asian History and Historiography, Cornell U.P., Ithaca, 1976.
- (6) Russell H. Fifield, "Southeast Asian Studies; Origins, Development, Future", in Journal of Southeast Asian Studies, VII-2 (1976).
- (7) Tunku Shamsul Bahrin et al. eds., A Colloquium on Southeast Asian Studies, Institute of SEA Studies, Singapore, 1981.
- (8) 河部利夫「地域学について」「東京外国语大学論集(Area and Culture Studies)」No.1 (1951)

- (9)川田侃「国際関係概論」東京大学出版会、1958（第1章）。
- (10)飯塚浩二「アジア研究について」「東洋文化」28（1959）。
- (11)中尾健一・井出義光「アメリカ研究とは何か」（全7回）「日米フォーラム」8巻2号（1962）～9巻8号（1963）。
- (12)本岡武「地域研究とは何か」「東南アジア研究」1号（1963）；「地域研究についての反省」同4号（1964）。
- (13)アジア・アフリカ研究所編「アジア・アフリカ研究入門」青木書店、1965。
- (14)東京外国语大学海外事情研究所「地域研究——その方法論と事例研究」1980.1.
- (15)東京大学教養学科「シンポジウム：地域研究の問題点」「教養学科紀要」13（1981）。
- (16)アジア政経学会「シンポジウム：『地域研究』の新しい展開」「アジア研究」18巻3/4号（1982）。
- (17)矢野暢「地域研究と政治学」日本政治学会編「政治学と隣接諸科学の間」岩波書店、1982。
- (18)衛藤瀧吉他「国際関係論」東京大学出版会、1982（序論）。
- (19)若月章「国際関係と地域研究」田中直吉編「国際関係論」有信堂、1981。
- (20)東京外大中島嶺雄研究室「地域研究へのアプローチ」1～4「歴史と未来」6号（1979）～10号（1983）。
- (21) Eto Shinkichi, "Asian Studies in Japan: Recent Trends", in Journal of Asian Studies, XXI-1 (1961).
- (22) Ichikawa Kenjiro comp., Southeast Asia viewed from Japan: A Bibliography of Japanese Works on Southeast Asian Societies, 1940-1963, Cornell U. SEA Program, Ithaca, 1965.
- (23) Wada Hisanori, "Development of Japanese Studies on Southeast Asian History", in Acta Asiatica, No. 18 (1970).
- (24) Nagazumi Akira, "Southeast Asian Studies in Japan", in Archipel, 9 (1975).
- (25)東洋文化研究所「特集：東南アジア研究の動向と問題点」「東洋文化」45（1968）。
- (26)アジア経済研究所「日本におけるアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ研究」「アジア経済」10巻6/7号（1969）。
- (27)アジア経済研究所「発展途上国研究：70年代日本における成果と課題」1978。
- (28)日本国際政治学会編「戦後日本の国際政治学」（国際政治61・62）有斐閣、1979。
- (29)東南アジア史学会編「東南アジア史学会員著作論文目録」1979。
- (30)矢野暢「東南アジア学の系譜〈読書案内〉」「東南アジア世界の構図」日本放送出版協会、1984。
- (31)島田虔次他編「アジア歴史研究入門」（第5巻）同朋舎、1984。
- (32)史学会「（各）年の歴史学界——回顧と展望」「史学雑誌」各編第5号。

#### 特別報告 歴史学の視点から

##### Problems and Issues in the Study of Early Burma

Michael Aung-Thwin

The period between the eighth and thirteenth centuries A.D. in Southeast Asia was a tremendous watershed. It was the time when the Theravada Buddhism of Mainland South-

- (9)川田侃「国際関係概論」東京大学出版会、1958（第1章）。
- (10)飯塚浩二「アジア研究について」「東洋文化」28（1959）。
- (11)中尾健一・井出義光「アメリカ研究とは何か」（全7回）「日米フォーラム」8巻2号（1962）～9巻8号（1963）。
- (12)本岡武「地域研究とは何か」「東南アジア研究」1号（1963）；「地域研究についての反省」同4号（1964）。
- (13)アジア・アフリカ研究所編「アジア・アフリカ研究入門」青木書店、1965。
- (14)東京外国语大学海外事情研究所「地域研究——その方法論と事例研究」1980.1.
- (15)東京大学教養学科「シンポジウム：地域研究の問題点」「教養学科紀要」13（1981）。
- (16)アジア政経学会「シンポジウム：『地域研究』の新しい展開」「アジア研究」18巻3/4号（1982）。
- (17)矢野暢「地域研究と政治学」日本政治学会編「政治学と隣接諸科学の間」岩波書店、1982。
- (18)衛藤瀧吉他「国際関係論」東京大学出版会、1982（序論）。
- (19)若月章「国際関係と地域研究」田中直吉編「国際関係論」有信堂、1981。
- (20)東京外大中島嶺雄研究室「地域研究へのアプローチ」1～4「歴史と未来」6号（1979）～10号（1983）。
- (21) Eto Shinkichi, "Asian Studies in Japan: Recent Trends", in Journal of Asian Studies, XXI-1 (1961).
- (22) Ichikawa Kenjiro comp., Southeast Asia viewed from Japan: A Bibliography of Japanese Works on Southeast Asian Societies, 1940-1963, Cornell U. SEA Program, Ithaca, 1965.
- (23) Wada Hisanori, "Development of Japanese Studies on Southeast Asian History", in Acta Asiatica, No. 18 (1970).
- (24) Nagazumi Akira, "Southeast Asian Studies in Japan", in Archipel, 9 (1975).
- (25)東洋文化研究所「特集：東南アジア研究の動向と問題点」「東洋文化」45（1968）。
- (26)アジア経済研究所「日本におけるアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ研究」「アジア経済」10巻6/7号（1969）。
- (27)アジア経済研究所「発展途上国研究：70年代日本における成果と課題」1978。
- (28)日本国際政治学会編「戦後日本の国際政治学」（国際政治61・62）有斐閣、1979。
- (29)東南アジア史学会編「東南アジア史学会員著作論文目録」1979。
- (30)矢野暢「東南アジア学の系譜〈読書案内〉」「東南アジア世界の構図」日本放送出版協会、1984。
- (31)島田虔次他編「アジア歴史研究入門」（第5巻）同朋舎、1984。
- (32)史学会「（各）年の歴史学界——回顧と展望」「史学雑誌」各編第5号。

#### 特別報告 歴史学の視点から

##### Problems and Issues in the Study of Early Burma

Michael Aung-Thwin

The period between the eighth and thirteenth centuries A.D. in Southeast Asia was a tremendous watershed. It was the time when the Theravada Buddhism of Mainland South-

east Asia, still very strong today, and the pre-Islamic Religion of Island Southeast Asia were firmly implanted; when the critical features of the region's subsequent polities had their fermentation; when the fundamental structures of Southeast Asia's economic institutions were being established; when the principles undergirding Southeast Asia's legal structure were being formed; and when the distinctive character of its social organization began to take root. This was the time of Southeast Asia's "classical states" — Sri Vijaya, Angkor, Pagan, Dai Viet, Sukhodaya, and (somewhat later) Majapahit.

Certainly it was the formative period in Burmese history, the counterpart of Mauryan India, Heian Japan, and Anuradhapuran Sri Lanka. Such a challenging period in Burmese history should have attracted more students, yet it did not. One could even argue that without a study of the Pagan period, one's understanding of Burmese society subsequently, though not unimportant, is incomplete. It is true that Pagan as a place, a period, and an idea fascinated more people, when compared to the colonial and modern periods in Burmese history, yet it had few serious commitments to its study. The Old Burmese language, the relative paucity of data on dramatic political events, and the difficulty in interpreting such data continued to be hindrances.

As a result of this disciplinary ambivalence, one of the problems that pre-colonial Burmese history has had to face is the lack of awareness and interest shown by early Burma historians for the social sciences and the advances they have made in Southeast Asian studies, particularly in the United States during the 1960s and 1970s. This has circumscribed the study of early Burmese history and society both methodologically and empirically. One of the ironies that developed in Burmese studies was that while Burmese historians with the language skills have been weak in current theoretical issues, Western historians of Burma endowed a wealth of theory have been weaker in the indigenous language. As a result, many of the latter chose to study the short, colonial period in Burmese history instead, from approximately 1886 to 1948, where English language sources are readily available as primary data, which only exacerbated the problem of "autonomous history" raised by John Smail many years ago.

Moreover, until recently, the historiography of premodern Burma had adopted, unwittingly perhaps, the view that history was no more than a series of important events derived from an organized assortment of facts. Even if the data were available for such a narrative history, one could argue that a study of early Burma and Southeast Asia should not rest so much on recovering the chronology of events or of individual accomplishments but on reconstructing institutions and their development. When one attempts to resurrect the origins of the state anywhere, Paul Wheatley once remarked, "there is no question of recovering anything like a continuous sequence of individual events..." We have no choice but "to deal with developmental patterns, with types of actions, with forms of social, political, and economic action, in short with generalized institutional evolution. To do this properly, the Geertzian method of recovering the past — concerned "not with individual thoughts and actions but with

formal developmental trends, not with incidents of the moment but with secular rhythms of sociocultural change" — is ideal.

This paper, thus attempts to place the twelfth- and thirteenth-century Kingdom of Pagan, to which Burma owes its heritage, in the broader context of Southeast Asian Studies and its more recent concerns. It is a summary of the methodology and perspective on the study of early Burmese history.

## 《研究矢豆幸良》

### 二つの「革命」とカトリシズム

池端雪浦

「フィリピン革命とカトリシズム」という、いまとりまとめている小著のタイトルを口にすると、決まって返ってくるのは、「あの戦車に立ち向かった修道女たちの姿は感動的でしたね」といったことばである。私はもう一つのフィリピン革命とカトリシズムについてまとめているのだが、そちらの革命を思い出してくれる人は少ない。

1896年から今世紀初頭にかけて展開されたフィリピン革命は、フィリピン諸島の広汎な地域を戦乱と激動にまき込んだ、文字通り社会の大変革運動であった。それに較べて今年2月の政治変革はその規模と変革の質において、革命の名には値しないというのが私の見方だが、フィリピンのマスコミ、ジャーナリズム界では、すでに、"February Revolution"ということばが定着している。"February Revolution"の実態分析と、それを経験した人々の実感と、歴史叙述の用語規定とが、微妙な緊張関係を孕みながらあるべきところに落ち着くのはいつのことか。

従って、括弧つきで二つの「革命」ということばを使うのだが、この二つの「革命」で、カトリシズムが運動展開の重要なファクターになったことは興味深いことである。フィリピンの政治文化のなかで、カトリシズムが決定的に重要な位置を占めていることが、二つの劇的歴史経験を通じて明らかにされたといえるだろう。勿論、二つの「革命」の間で、教会が置かれている社会的、政治的立場は大きく変化したから、「革命」の展開要因としてのカトリシズムの機能も両者の間で変化している。それでもなお、二つの「革命」において、少なくとも次の共通したカトリシズムの機能を指摘できるのだ。(1)教会の先鋭的部分によって、「革命」以前から反体制運動が組織されていたこと。(2)カトリシズムの論理によって、別言すればイエスの受難と再生のドラマによって、変革運動を構想する発想の運動化がみられたこと。(3)カトリシズムの神の祝福が、運動を正当化し、従ってそれを勝利に導くという一般的了解があって、それを前提としたさまざまな儀礼や行動が革命過程で組織されたこと。(4)民衆の政治動員にあたって、教会と神父が大きな役割を果たしたこと。(5)「革命」過程における人心の動搖と不安が、教会と神父によって癒され支えられたこと。今回の「革命」過程を想起していただければ、これらの現象は逐一納得されるであろう。要するにカトリシズムは、教会という組織を通して、また、そのイデオロギーによって、「革命」の展開過程に強力な影響を及ぼしたのである。先の革命におけるその点の理論化と実証は小著で果たされるはずだが、今回の「革命」について、それを試みる人はいないのだろうか。

formal developmental trends, not with incidents of the moment but with secular rhythms of sociocultural change" — is ideal.

This paper, thus attempts to place the twelfth- and thirteenth-century Kingdom of Pagan, to which Burma owes its heritage, in the broader context of Southeast Asian Studies and its more recent concerns. It is a summary of the methodology and perspective on the study of early Burmese history.

## 《研究矢豆幸良》

### 二つの「革命」とカトリシズム

池端雪浦

「フィリピン革命とカトリシズム」という、いまとりまとめている小著のタイトルを口にすると、決まって返ってくるのは、「あの戦車に立ち向かった修道女たちの姿は感動的でしたね」といったことばである。私はもう一つのフィリピン革命とカトリシズムについてまとめているのだが、そちらの革命を思い出してくれる人は少ない。

1896年から今世紀初頭にかけて展開されたフィリピン革命は、フィリピン諸島の広汎な地域を戦乱と激動にまき込んだ、文字通り社会の大変革運動であった。それに較べて今年2月の政治変革はその規模と変革の質において、革命の名には値しないというのが私の見方だが、フィリピンのマスコミ、ジャーナリズム界では、すでに、"February Revolution"ということばが定着している。"February Revolution"の実態分析と、それを経験した人々の実感と、歴史叙述の用語規定とが、微妙な緊張関係を孕みながらあるべきところに落ち着くのはいつのことか。

従って、括弧つきで二つの「革命」ということばを使うのだが、この二つの「革命」で、カトリシズムが運動展開の重要なファクターになったことは興味深いことである。フィリピンの政治文化のなかで、カトリシズムが決定的に重要な位置を占めていることが、二つの劇的歴史経験を通じて明らかにされたといえるだろう。勿論、二つの「革命」の間で、教会が置かれている社会的、政治的立場は大きく変化したから、「革命」の展開要因としてのカトリシズムの機能も両者の間で変化している。それでもなお、二つの「革命」において、少なくとも次の共通したカトリシズムの機能を指摘できるのだ。(1)教会の先鋭的部分によって、「革命」以前から反体制運動が組織されていたこと。(2)カトリシズムの論理によって、別言すればイエスの受難と再生のドラマによって、変革運動を構想する発想の運動化がみられたこと。(3)カトリシズムの神の祝福が、運動を正当化し、従ってそれを勝利に導くという一般的了解があって、それを前提としたさまざまな儀礼や行動が革命過程で組織されたこと。(4)民衆の政治動員にあたって、教会と神父が大きな役割を果たしたこと。(5)「革命」過程における人心の動搖と不安が、教会と神父によって癒され支えられたこと。今回の「革命」過程を想起していただければ、これらの現象は逐一納得されるであろう。要するにカトリシズムは、教会という組織を通して、また、そのイデオロギーによって、「革命」の展開過程に強力な影響を及ぼしたのである。先の革命におけるその点の理論化と実証は小著で果たされるはずだが、今回の「革命」について、それを試みる人はいないのだろうか。

## 諸蕃志の蘇吉丹の位置について

深見純生

蘇吉丹は諸蕃志では專条がある外、蘭婆國などの条に見え、他書では東西洋考（巻四思吉港、巻九西洋針路）、名山藏（王享記）にその名が見える。また島夷誌略の爪哇条の吉丹、蘇門傍条の斯吉丹も蘇吉丹に同定されることが多い。蘇吉丹は原音と位置の比定にいまだ定説のない地名の一つで、原音ではスカダナ(Sukadana)説とスキタン(Sukitan)<sup>(1)</sup>またはスクタン(Suketan)<sup>(2)</sup>とする説の二説あり、位置ではジャワに求める説とカリマンタンに求める説がある。

スキタン／スクタン説は一定の支持を得ているが<sup>(3)</sup>、その弱点は第一にその名が古代ジャワ史料にも現在の地名にも見られないことであり、第二に諸蕃志における蘇吉丹、戎牙路（ジャンガラ）、打板の位置関係と適合しないことである。即ち、この説は蘇吉丹と戎牙路をともにジャンガラに同定し、また打板=トゥバンという通説を否定して打板をトゥマブル(Tumapel、現シンガサリ)とすることの上に成り立つものである。しかし諸蕃志蘇吉丹条に「其〔蘇吉丹〕地連百花園、麻東、打板、禱寧、戎牙路云々」があり、蘇吉丹と戎牙路は明らかに別の地とされ、また、西から東に新施(スンダ)→蘇吉丹→打板、および打板→戎牙路という位置関係が得られ、後者はトゥマブルとジャンガラの位置関係と矛盾する。蘇吉丹と戎牙路の一方を狭義のジャンガラ（スラバヤ地方）、他方を広義のジャンガラ（スラバヤ地方を含む東部ジャワの或る部分）と解しても、新施→蘇吉丹→打板、打板→戎牙路という位置関係との矛盾は解決し難いと思われる。

諸蕃志では蘇吉丹が蘭婆の支国であることが繰り返し述べられ、西から東に新施→蘇吉丹→打板とされ、そして保老岸山（ムリア山）から遠くないとされるので、明らかに中部ジャワである。他方明代では、東西洋考に「思吉港者、蘇吉丹之訛也、爲爪哇屬國、其中凡數聚落、而吉力石、其主也云々」、名山藏に「蘇吉丹者、曰吉力石」とあり、吉力石はグレシックであるゆえ、蘇吉丹もグレシックということになる。

原音スカダナ説では、現在のジャワにスカダナの地名がなく、カリマンタン南西部にスカダナがあるので、位置をこれに比定する説<sup>(4)</sup>、明代の蘇吉丹をスラバヤ市内北部にあるスコドノとする説<sup>(5)</sup>がある。しかし諸蕃志の蘇吉丹は中部ジャワに、明代の蘇吉丹はグレシックに求めるべきであり、事実中部ジャワとグレシックにスカダナ——ジャワ語でスコドノ(Sukodono)——が存在する。蘭印測量局が作成し日本の参謀本部陸地測量部が昭和十八年に複製したジャワ島の五万分の一の地図によれば、ムリア山西方ジャパラの町の南約四kmと、グレシックの西郊にスコドノがある。ジャパラのスコドノはフェットの「蘭印地理統計辞典」にも挙がっている<sup>(6)</sup>。

諸蕃志蘇吉丹条は10世紀以降史料の乏しい中部ジャワ古代史の貴重な史料と言うべきである。  
注 (1) W.P. Groeneveldt, "Notes on the Malay Archipelago and Malacca", VBG, 39, 1876, pp.54-56. (2) G.P. Rouffaer, "Was Malaka Emporium voor 1400A.D.....", BKI, 77, 1921, pp.135-140. (3) N.J. Krom, Hindoe-Javaansche Geschiedenis, 2nd. ed., 1931, p.277; G. Coedes, The Indianized States of Southeast Asia, Honolulu, 1968, p.186. (4) 藤田豊八「島夷誌略校注」北京、1915, pp.73-74; W.W. Rockhill, "Notes on the Relations.....", TP, 1914, p.238; 蘇繼廣「島夷誌略校釋」北京、中華書局、1981, p.166. (5) B. Schrieke, Indonesian Sociological Studies, I, 2nd. ed., 1966, p.249; 長岡新治郎「明代の蘇吉丹について」『東方学』18, 1959. (6) P.J. Veth, Aardrijkskundig en Statistisch Woordenboek van N.-I., 1869, III, p.367.

## 地 区 研 究 例 会

〔関東例会〕

会場：上智大学

昭和61年5月10日 「ベトナム読書人の反仏運動について—1874年の文紳一揆—」坪井善明

6月28日 「ビルマ農民大反乱（1930—32年）の研究—反乱下の農民像を中心として—」  
伊野憲治

7月26日 「クメール・ルージュの形成過程」小倉貞男

9月27日 「J.スコットの『モラル・エコノミー論』とその展開をめぐって」高田洋子  
〔関西例会〕

会場：京都大学東南アジア研究センター

昭和61年4月26日 <関西例会10周年記念講演会>

「満鉄東亜經濟調査局の南方研究について」中村孝志

「東南アジア史研究の未来像」山本達郎

5月24日 「日本軍政期ジャワ村落におけるリーダーシップの変容」倉沢愛子

6月28日 「ビルマ語版『彼岸道品』（パラヤナウットゥ）について」原田正美

7月19日 「ビルマ史研究の課題と展望—ビルマ史における連續性と王権概念」  
渡辺佳成

9月6日 「現代フィリピン官僚制論—高級官僚の任用をめぐって」片山裕

## ■■■■■事務局移転のお知らせ■■■■■

桃木庶務委員の海外留学にともない、このたび、事務局は下記に移転することとなりました。  
今後、お問合わせ等、御連絡は移転先の方にお願いいたします。



記

※昭和62年3月31日まで

〒606 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部東洋史研究室 気付 ☎ 075-751-2111 (ex.2790)

渡辺佳成、八尾隆生

※昭和62年4月1日より

〒606 京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究センター 桜井研究室内 ☎ 075-751-2111 (ex.7339)

# 「東南アジア—歴史と文化」原稿締切迫る

No.16 (1987年6月刊行予定)

原稿締切：1986年11月末日

「東南アジア—歴史と文化」No.16は例年通り、明年6月に開催予定の本学会春季大会に合わせて刊行する予定にしております。既に投稿を準備されている方は、原稿締切日をお間違えないようお願いいたします。また【書評・紹介】、【モンスーン・学界消息】欄への投稿が不足気味です。今から準備されても十分間に合うかと存じます。奮って御投稿下さい。なお、編集の迅速さ、正確さを期すため、下記の執筆要領を御参照の上、完成原稿をもって御投稿くださるようお願い申し上げます。

## 執筆要領

学術雑誌としての精密さを高めるために、次の点について御協力をお願いいたします。

1. 投稿論文は編集部の責任によって選定の上、編集します。採用原稿は原則として返却しません。また稿料の支払い、掲載料の徴収はしません。論文、研究ノートの抜刷りは30部に限ります。
2. 用語は日本語（なるべく当用漢字、新かなづかい）で横書きして下さい。欧文、特殊文字（タイ文字等）のある原稿、写真、付図の掲載については投稿前に編集委員会へ御相談下さい。
3. 論文、研究ノート等の原稿は200字詰横書き原稿用紙100枚以内、書評・紹介は50枚、学界消息は10枚以内にまとめて下さい。
4. 内容に関する読者の質問のために、本文末尾に郵便連絡の宛先を書いて下さい。
5. 論文には欧文要旨（500～1,000語）をつけて下さい。その他の原稿にも英文タイトルをつけて下さい。特に学界消息の英文タイトルは簡潔にして、一行以内に納まるようにして下さい。編集委員会の責任において、欧文の訂正をすることがあります。あらかじめ御了承下さい。
6. 註は本文末尾にまとめて下さい。論文末尾に参考文献をつける場合は次の例に倣って下さい。

Hall, D.G.E. 1981. A History of South-East Asia. (Fourth ed.). London: Macmillan.

Damrong, Prince. 1915. "The Story of the Records of Siamese History." Journal of the Siam Society, 11-2. pp.61-92.

太田常蔵 1967. 「ビルマにおける日本軍政の研究」東京：吉川弘文館。

岸 幸一 1965. 「インドネシアにおける近代化と地域主義(1)」『アジア経済』4-8. (1965, 8). pp.14-27.

投稿についての問い合わせ先：

〒102 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学アジア文化研究所 気付 「東南アジア—歴史と文化」編集委員会 (TEL 03-238-3697)

---

昭和61年10月発行

発行者 東南アジア史学会 (会長 石井米雄)

住所 〒606 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部東洋史研究室

電話 075-751-2111 内線 2790

郵便振替 京都 3-30980 東南アジア史学会

---